

あくれば、馬一疋出て、いな、ひてはしりてゆく、夜にて門をさすゆへに、庭にをどりまはる、又一疋いで、又一疋出、五疋出たり、今一疋出べしとてまでも出ず、火をあかしてみれば何もなし、今一人はいづかたへ行たるぞとたづぬる間に、すのこの下より出て、うしろの山にのぼりて遠く行なり、翌日國のしゆご所にゆきて、上くだんのやうをつぶさにかたれば、しゆごのいはく、曲事なり、聞をよびし事さてはまことなりとて、人数をそつして彼に發向し、人をみなうちころしてはたすなり、

〔醍醐隨筆〕下松永彈正久秀、多門在城の時、果心居士とて幻術の者有、閑暇の時は語りなぐさむ、ある夜、彈正、われ戰場において白刃を交るに至ても、終に恐懼の心を動かす事なし、汝試に幻術を行て、われを恐懼せしめよと云、果心さらば近習の人を遠けて、寸刃をも持たまはず、燈も消したまへなどいへば、各立のきける、刀劍のたぐひををくべからずといましめ、火うちけちて彈正一人箕踞して居れり、果心つゝあたちて廣縁をあゆみ、前栽の間へ行とぞ見えし、俄に月くらく雨そほふりて、風蕭颯たり、蓬窓の裏にして瀟湘にたゞよひ、荻花の下にして潯陽にさまよふらんも、かくやと思ふばかり、ものがなしくあぢきなし、氣よはく心ほそくして、たへがたくなむ、いかにしてかく成ぬるやと、はるかに外を見やりたるに、廣縁にたゞすむ人あり、雲すきに見出しぬれば、ほそくやせたる女の髪長くゆりさげたるが、間近くあゆみよりて、彈正にむかひて坐せり、何人ぞととへば、大息つゝて苦しげなる聲して、今夜はいとつれづれにやおはすらん、人さへなくとといふをきけば、うたがふべくもあらぬ五年已前病死して、あかぬわかれをかなしみぬる妻女なりけり、彈正たへがたくすさまじければ、果心居士やめよくとよば、るに、件の女たちまち居士が聲となりて、これに侍るなりといふを見れば、果心なり、いかゞして、これ程まで人の心をまどはすらんと、彈正もあきれてけり、もとより雨もふらず、月もはれわたりてくもらざりけ